

グーグーだって猫である

2008(平成20)年7月16日鑑賞〈角川映画試写室〉

★★★



監督・脚本＝犬童一心／原作＝大島弓子『グーグーだって猫である』（角川書店刊）／出演＝小泉今日子／上野樹里／加瀬亮／林直次郎（平川地一丁目）／伊阪達也／大島美幸（森三中）／黒沢かずこ（森三中）／村上知子（森三中）／マーティ・フリードマン／大後寿々花／小林亜星／松原智恵子（アスミック・エース配給／2008年日本映画／116分）

……天才漫画家大島弓子の私生活を投影した、「新鮮な感動と愛の映画」の登場だが、ワタシ的には現実との乖離の大きさが難点……？ やはり不幸は不幸として、ちゃんと描かなければ！ その意味で、この映画はおとぎ話……？ 小泉今日子の透明感ある演技はさすがだが、上野樹里はいつまでもNo.2の位置に甘んじてはダメなのでは……？

原作は？ 舞台は？ テーマは？

私はこの映画の原作者であり少女漫画の巨星と言われている大島弓子を全然知らない。したがって、彼女が飼っていたという1匹目のネコ「サバ」（フランス語で「元気？」という意味）も、2匹目のネコ「グーグー」（good goodという意味）のことも全く知らない。

また、この映画の舞台となっている他、それ自体がストーリー形成の大きな核となる中央線の吉祥寺駅やその境界も、名前だけは知っているが訪れたことがないから、その雰囲気は全くわからない。

そんな、夏目漱石の向こうを張ったようなタイトルの映画のテーマは、猫の生態。いやいや、そうではない。この映画のテーマは、大島弓子自身のグーグーを中心とした私生活（？）を投影させた、日常的でありながら非日常的（？）、悲劇的でありながら喜劇的（？）な不思議な生活感。私はそんな風に理解したが……。

代表作を見逃している私としては……？

監督犬童一心と女優小泉今日子のコラボは今回がはじめて。この映画を観ていると、私の目にはなぜ2人はもっと早く組まなかったのかと不思議に思えるほどの相性の良さ……？ しかし残念なのは、私が両者についてその代表作を見逃していること。

つまり、犬童一心監督については、『ジョゼと虎と魚たち』（03年）（『シネマルーム7』185頁参照）、『死に花』（04年）（『シネマルーム4』338頁参照）、『タッチ』（05年）（『シネマルーム8』196頁参照）、『眉山』（07年）（『シネマルーム13』267頁参照）は観ているが、その代表作である『メゾン・ド・ヒミコ』（05年）を見逃している。他方、女優小泉今日子についても、『雪に願うこと』（05年）（『シネマルーム11』81頁参照）、『涙そうそう』（06年）（『シネマルーム12』196頁参照）、『ユメ十夜』のうち実相寺昭雄監督作『第一夜』（07年）（『シネマルーム13』425頁参照）、『やじきた道中てれすこ』（07年）は観ているが、代表作である『空中庭園』（05年）を見逃している。

そんな私としては、2人の初顔合わせとなったこの映画が、2人の代表作になってくれればいいのだが、残念ながらそれはちょっと高望み……？ すなわち、この映画の出来はそれほどでは……？

ストーリーは、サバとの別れから……

この映画は、締め切りに追われた天才漫画家の小島麻子（小泉今日子）が、アシスタントのナオミ（上野樹里）と3人組の加奈子（大島美幸）、美智子（黒沢かずこ）、咲江（村上知子）の協力を得て不眠不休でマンガ製作に集中している模様からスタートする。アニメ製作も大変だが、マンガ製作も1枚ずつの手作業だから、ホントに大変なことがよくわかる。

マンガがやっと完成し、アシスタントたちと別れた麻子が目撃したのが、そんな作業をかげからじっと見守っていた麻子の愛猫サバが、お気に入りのソファの上で息をひきとっている姿。これ以降、仕事においても、私生活においても、麻子の調子が悪くなったのは当然……。

その後のストーリーの展開は？

この映画はそんなストーリーから始まり、その後は①麻子とグーグーとの出会い、



© 2008 『グーグーだって猫である』 フィルム・コミッティ

②グーグーを交えた新しい生活の中での、麻子と沢村青自（加瀬亮）との出会い、③サバとの別れを乗り越えて、新作に取り組みはじめた麻子を襲った卵巣ガンの恐怖、と続いていくから、その展開模様はあなた自身の目で。

この卵巣ガンの話がどこまで実話なのか、つくり話なのかは知らないが、それまで麻子の幸せな日常生活を淡々と描いていた映画は、ここで突然転調することに。しかも、麻子の卵巣ガンは初期ではなく、既にかなり進行していたらしい。すると。この映画の後半は、最近多い難病モノで涙を要求してくるヤツ……。たしかにそれもありだが、大島弓子は現役の人気漫画家だから、そういうストーリー展開はないはず……？

No. 2 に甘んじていては……

長澤まさみと並ぶ大型の若手美人女優上野樹里の代表作は、『亀は意外と速く泳ぐ』（05年）と『幸福のスイッチ』（06年）を観ていない私としては、断然『サマータイムマシン・ブルース』（05年）（『シネマルーム 8』150頁参照）。上野樹里と犬童一心監督との顔合わせは『ジョゼと虎と魚たち』に続く2作目だが、『ジョゼと虎と魚たち』

(07年)の主役が、圧倒的な存在感を見せつけた池脇千鶴だったように、この映画でも主役を小泉今日子に譲り、上野樹里は役柄でも麻子のアシスタントだし、位置づけもNo.2に。別にすべての作品で主役でなければならぬわけではないが、同じ監督で2本もNo.2として(便利に)使われるのは、彼女のキャリア形成のうえでいかがなもの……? あまりにも生意気だとしてみんなから嫌われている(?)沢尻エリカのように、「こんなNo.2の役はイヤ!」と言うくらい自己主張をした方がいいのでは……?

そんな上野樹里扮するナオミは恋人マモル(林直次郎)との関係においても、どこかお人好しで、マモルが女子高生(?)とデキてしまっても、結局それを認めてしまう始末。自分には才能がないから麻子の助手としてやっていくしかないと諦めるのも悪くはないし、麻子と青自との恋のキューピッドの役に徹するのも悪くはないが、そんな便利屋として一生を送るのはもったいないのでは……? この映画はあくまで大島弓子自身を投影させた麻子が主役になるのは当然だが、No.2役の上野樹里には、もっと突っばってほしかったと思ったのは私だけ……?

意外にポイン! 麻子と青自の恋の行方は?

診察のために病院を訪れた麻子が、看護師に言われるままに服を脱ぎブラジャー越しながら、意外に豊満(?)な乳房を見せてくれるサービスには一瞬感激したが、医師がああ青自だと知ってまた服を着てしまったのは残念……。

さて、麻子と青自の恋模様はどうなるの……? 主治医と患者という関係ではなかなかうまくいかないと思うのだが、もちろんこの映画はその結論を出すことが目的ではないから、麻子と青自の恋の行方はあいまいなまま……。また、視点を変えて考えても、麻子と青自の恋模様は、仕事中心の麻子の人生の中ではちょっとしたエピソードにすぎないのでは……? また、青自の方も、来年の春には父親が経営している田舎の病院に移るらしいから、麻子は気に入っていたマンガ家さんという程度の位置づけ? したがって、2人の恋模様はこの時点でジ・エンド……?

死に神やサバなど、登場人物は自由自在

面白いのは、ストーリー展開の中で何の脈絡もないまま時折登場していた英会話教室の教師ポール(マーティ・フリードマン)が、実は「死に神」だったということ。

また、そんな死に神に導かれて、麻子が一瞬出会うことができたのがサバの生まれ変わりだという若い少女サバ（大後寿々花）だったことも面白い。犬童一心監督がこの映画に登場させる人物は、このように自由自在だ。

しかし、私が納得できないのは、いつも忠実な助手として麻子を支えているナオミや加奈子、美智子、咲江と同じように、死に神やサバたちも、結果的にみんな麻子の応援団になってしまうこと。しかし、それはちょっと甘すぎでは……？ また、あまりにも現実から乖離しすぎているのでは……？

新鮮な感動？ 愛の映画？

プレスシートのイントロダクションには、「ふと気づくと、いつの間にか肩の力が抜けて、生きるのが少し楽になる。今までに味わったことのない、新鮮な感動をお届けいたします」「いつの間にか、元気づけられ、少しだけ勇気がもらえる。新鮮な感動が涙を誘う、愛の映画が誕生した」と紹介され、プロデューサーの小川真司氏も、同じようなニュアンスの「プロデューサーからの言葉」を書いている。

たしかに、犬童一心監督がこの映画で淡々と描くのはそんな世界だが、私が気になるのは登場人物がみんないい人ばかりだということ。また、麻子は末期の卵巣ガンとなり、つらく苦しい抗ガン剤治療を受けていながら、豊かな髪の毛には何の影響もないなど、あまりにもその描き方は現実から乖離していること。したがって、おとぎ話として、あるいは夏真っ盛りの今一服の清涼剤として観るのならそれでいいのだが、やはりこれでは、監督犬童一心と女優小泉今日子コンビの代表作という出来にはとても、とても……？

2008(平成20)年7月19日記